

〔注〕合方の場合は数量の多い方を取る。たとえば3～4では4

- *1 漢方製剤等(一般用医薬品)の取り扱いについて(その一)記載
- *2 漢方製剤等(一般用医薬品)の取り扱いについて(その一)記載
- *3 加味逍遙散(上段)と四物湯(下段)の合方
- *4 加味逍遙散(上段)と四物湯(下段)の合方
- *5 加味逍遙散に川芎、地黄各3を加える。
- *6 加味逍遙散に四物湯の合方。すなわち川芎と地黄を各3加える。
- *7 加味逍遙散(上段)に四物湯(下段)を合方
- *8 加味逍遙散(上段)、四物湯(下段)を合して
- *9 加味逍遙散加地黄川芎
- *10 加味逍遙散。症状により地黄・川芎を加味する。

〔注1〕 湿疹：虚証の婦人に多く見られる慢性湿疹で、貧血の傾向があり、発疹の状態は滲出液が少なく結痂を作らず、乾燥して痒痒を訴えるものによる。

面疱：この方も貧血性、あるいは悪液質性の人によく用いられる。

〔注2〕 五十肩(肩関節周囲炎)：夜間、床に入ると、手がだるく痛み、あるいは蒲団に入れていると煩熱し、蒲団から出すと冷えて痛み、手のおきどころがなく、安眠のできないものに用いる。婦人に多くみられる。

湿疹：虚弱の婦人で、貧血気味、慢性化し、分泌物も少なく、乾燥性で痒みを覚えるというものには本方がよい。

肝斑(しみ)：虚弱貧血性の婦人で、更年期近くになって現われたものには本方で快方に向うものがある。

鞏皮症：虚証の婦人に発したもので、内分泌障害や神経症状のあるものに長期に服用させるとよいことがある。

〔注3〕 頑固な婦人病、湿疹には四物湯の合方、すなわち川芎と地黄を各3.0加える。

〔注4〕 婦人の皮膚病で諸薬の応じないものに、四物湯を合方してよいことがある。

〔注5〕 加味逍遙散は四物湯と合して湿疹などの皮膚病に用いられる。

〔注6〕 加味逍遙散加地黄川芎として記載

五十肩：〔注1〕の五十肩と同文。

肝斑(しみ)、月経不順、疲労倦怠、肩こり、頭痛などがあって大便の快通しないものによる。地黄、川芎を加えてよいことがある。

黒皮症：この方の効くものがある。

〔注7〕 加味逍遙散：皮膚の病気、貧血ぎみの足腰が冷える虚弱体質の婦人で、湿疹が慢性化して乾燥し、かゆみのあるものに用いる。腹診すると、軽い胸脇苦満を認めることがある。本方は肝機能の障害で発生する肝斑にもよく用いられ、また症状により、地黄、川芎、荊芥、地骨皮などを加える。足腰が冷える虚弱タイプの婦人の慢性蕁麻疹に用いる。症状により、地黄、川芎を加味する。

処方番号：110

処方名：辛夷清肺湯（しんいせいはいとう）

処方構成：

辛夷 2-3、知母 3、百合 3、黄芩 3、山梔子 1.5-3、麦門冬 5-6、石膏 5-6、升麻 1-1.5、枇杷葉 1-3

用法・用量：

湯

しばり：

体力中等度あるいはそれ以上で、濃い鼻汁が出て、ときに熱感を伴うものの次の諸症

効能・効果：

鼻づまり、慢性鼻炎、蓄膿症

原典：外科正宗

出典：勿誤薬室方函

解説：

臨床では鼻閉塞・鼻茸（鼻ポリープ）・肥厚性鼻炎・上顎洞化膿症などに用いられる。

110. 辛夷清肺湯

参考文献名	辛夷	知母	百合	黄芩	山梔子	麦門冬	石膏	升麻	枇杷葉
処方分量集	2	3	3	3	3	5	5	0.5~1	2
診療の実際	2	3	3	3	3	5	5	1	2
診療医典	2	3	3	3	3	5	5	1	2
処方解説 注1	2	3	3	3	3	5	5	1	2
漢方処方集 注2	3	3	3	3	1.5	6	6	1.5	1
漢方あれこれ 注3	2	3	3	3	3	5	5	1	3
応用の実際	-	-	-	-	-	-	-	-	-
明解処方	-	-	-	-	-	-	-	-	-

【注1】 肺熱，鼻内瘻肉，初めざくろの実の如く，日後漸く大きく，孔竅を塞ぎ，氣宣通せざるものを治す。鼻閉塞，鼻茸，肥厚性鼻炎，上顎洞化膿症などに応用される。他の処方で効かないとき試みるとよい。

【注2】 濃い鼻汁が出る熱性の蓄膿症，肥厚性鼻炎。

【注3】 膿がたくさんたまって，口をあけただけで膿がみえるというような症状。

参考 浅田宗伯の勿誤薬室方函によると「肺熱，鼻内瘻肉，初めは榴子の如く，日後漸く大きく，孔竅を閉塞し，氣の室通せざるを治す。」

勿誤薬室方函口訣によると

「此方は脳漏鼻淵，鼻中瘻肉，或は鼻香臭を聞かざる等の症，すべて熱毒に属する者に用いて効あり。脳漏鼻淵は大抵葛根湯加川芎大黃，或は頭風神方に化毒丸を兼用して治すれども，熱毒あり疼痛甚しき者は，此方にあらざれば治すること能はず。」

処方番号：111

処方名：秦艽羌活湯（じんぎょうきょうかつとう）

処方構成：

秦艽 3、羌活 5、黄耆 3、防風 2、升麻 1.5、甘草 1.5、麻黄 1.5、柴胡 1.5、藁本 0.5、細辛 0.5、
紅花 0.5

用法・用量：

湯

しぼり：

体力中等度なものの次の症状

効能・効果：

かゆみのある痔疾

原典：蘭室秘蔵

出典：

解説：

李東垣の『蘭室秘蔵』痔瘻門に「痔瘻で塊を成し、下垂しその癢（痒い）を任せられず」とあり、方後に「風寒のところで大小便を忌む」と記している。かゆみが強い肛門疾患を目標とする。痔ろうや痔核・脱肛があつて、分泌物が出て、痒くて耐えられないという状態に用いられる。

111.秦朮羌活湯

参考文献名	秦朮	羌活	黄耆	防風	升麻	甘草	麻黄	柴胡	藁本	細辛	紅花
診療医典 注1	3	5	3	2	1.5	1.5	1.5	1.5	0.5	0.5	0.5
治療の実際	3	5	3	2	1.5	1.5	1.5	1.5	0.5	0.5	0.5

【注1】 衆方規矩の痔漏門に「秦朮羌活湯は、痔漏塊をなしさがたれて、その痒に堪えざるを治す」あり、私はこれを、痔核、痔瘻などで、かゆみのあるものに用いる。

備考：中国医学大辞典（謝観）治痔漏成塊下墜。瘙癢不已。

処方番号：112

処方名：秦艽防風湯（じんぎょうぼうふうとう）

処方構成：

秦艽 2、沢瀉 2、陳皮 2、柴胡 2、防風 2、当帰 3、蒼朮 3、甘草 1、黄柏 1、升麻 1、大黄 1、桃仁 3、紅花 1

用法・用量：

湯

しぼり：

体力中等度で、便秘傾向があるものの次の症状

効能・効果：

痔核で排便痛のあるもの

原典：蘭室秘蔵

出典：

解説：

李東垣の『蘭室秘蔵』痔瘻門に「痔瘻で毎日の大便時痛みを発するものを治す。痛みを感じないものは痔瘻ではない。」とあり方後に「風寒を避け、房事・酒湿麵・大辛（すごく辛いもの）を忌む」と記している。排便するたびに痛みの強い肛門疾患を目標とする。痔核があり、排便痛のあるものに用いられる。

112. 秦朮防風湯

参考文献名	秦朮	沢瀉	陳皮	柴胡	防風	当帰	朮	桃仁	甘草	黄柏	升麻	大黃	紅花	用法・用量
診療医典	注1	2	2	2	2	3	3	3	1	1	1	1	1	*
処方分量集		2	2	2	2	3	3	3	1	1	1	1	1	

* 空腹時に飲む。

〔注1〕 便秘の傾向があつて、排便のときに疼痛を發し、ときどき膿がたまつて、しかも体力は相當に充實しているというものによい。痔漏ばかりでなく、痔核で痛み出血するものによい。通じの具合で大黃は加減する。

毎日大便するときに痛む痔漏を治すに用いる。小泉栄次郎著 和漢薬
中国医学大辞典（謝観） 治痔漏大便時痛

処方番号：113

処方名：神仙太乙膏（しんせんたいつこう）

処方構成：

当帰 1、桂皮 1、大黃 1、芍薬 1、地黄 1、玄参 1、白芷 1、ゴマ油 48、ミツロウ 48

用法・用量：

外用

しばり：

（しばりなし）

効能・効果：

切り傷、かゆみ、虫刺され、とこずれ、やけど

原典：太平惠民和剂局方

出典：

解説：

宋の徽宗の勅により、全国からの優秀処方を収集した『和剂局方』の八巻に「八発（背発など八種類のたちの悪いおでき）癰疽、一切の悪瘡軟癬を治す。年月の深遠を問わず。すでに膿をなすものにも、未だ膿をなさざるものにも、これを貼ればただちに効あり。蛇・虎・さそり・犬・湯火・刀斧に傷付けられるに、内服と外貼すべし。……」と記載されている。

113.神仙太乙膏

参考文献名	当 帰	玄 参	桂 枝	地 黄	芍 薬	白 芷	大 黄	ゴ マ 油	ミ ツ ロ ウ	用法・用量
タイツコウ軟膏添付文書 注1	1	1	1	1	1	1	1	48	48	*1

*1 用法:塗布

注1

きりきず(切傷)、虫さされ(咬傷)、とこずれ(褥瘡)、火傷及びその他の肉芽形成(火傷)

処方番号：114

処方名：参蘇飲（じんそいん）

処方構成：

蘇葉 1-1.5、枳実 1-1.5、桔梗 2、陳皮 2、葛根 2、前胡 2、半夏 3、茯苓 3、人参 1.5、大棗 1.5、生姜 0.5-1（ヒネショウガを使用する場合 1.5-3、生姜の代わりに乾姜も可）、木香 1-1.5、甘草 1（木香はなくても可）

用法・用量：

湯

しばり：

体力虚弱で胃腸が弱いものの次の諸症

効能・効果：

感冒、せき

原典：太平惠民和劑局方

出典：

解説：

四時の感冒で熱があり頭が痛く、咳や痰が出て声が重く、鼻水が出て、みぞおちがつかえ嘔吐して水を吐くような症状のものを治すに用いる。皮膚に触れると非常に熱く感じる場合に用いることが多い（肌熱）。

一般に胃の弱い人で、葛根湯や桂枝湯を飲むと胸につかえるような、感冒に咳や痰が出るというような症状のものによいものとされている。

通常は生姜を用いる。

114.参蘇飲

参考文献名	紫蘇葉	枳実	桔梗	陳皮	葛根	前胡	半夏	茯苓	人参	大棗	生姜	乾姜	木香	甘草
診療医典	1	1	2	2	2	2	3	3	1.5	1.5	1.5	-	1	1
治療の実際	1	1	2	2	2	2	3	3	1.5	1.5	1.5	-	1	1
処方解説 注1	1.5	1.5	2	2	2	2	3	3	1.5	1.5	-	1	1.5	1
応用の実際 注2	1	1	2	2	2	2	3	3	1.5	1.5	1.5	-	1	1
処方分量集	1	1	2	2	2	2	3	3	1.5	1.5	-	1	1	1
漢方処方集	3	3	3	3	6	6	3	3	2	2	-	1	1.5	2
太平惠民和剂局方*2	3分*1	半両	半両	半両	3分	3分	3分	3分	3分	-	-	-	半両	半両

*1 漢方で使用する蘇葉は*Perilla frutescens* BRIT. var. *crispa* DECNE(シソ)を基源にする生薬であるが、和剂局方(商務印書館版)の本剤に配合する蘇葉は白蘇、すなわち分類学上、シソの母種に当る*Perilla frutescens* BRIT.(エゴマ)を基源にする生薬であると考えられる。

*2 和剂局方の本方には大棗と生姜を欠いている。

注1 気管支炎，肺炎，酒毒，気鬱症，悪阻などにも応用する。

注2 喘息，神経症，神経性不食症などに用いる。

注3 熱と痰のある感冒，悪心。

処方番号：115 処方名：神秘湯（しんぴとう）

処方構成：

麻黄 3-5、杏仁 4、厚朴 3、陳皮、2.5-3、甘草 2、柴胡 2-4、蘇葉 1.5-3

用法・用量：

湯

しぼり：

体力中等度あるいはそれ以上で、せき、喘鳴、息苦しさがあり、たんが少ないものの次の諸症

効能・効果：

小児ぜんそく、気管支ぜんそく、気管支炎

原典：外台秘要方

出典：勿誤薬室方函

解説：

『外台秘要方』の原方には、厚朴、甘草を欠いているが、浅田家方など日本で常用されるものには、厚朴と甘草を加味している。ぜんそくなどの喘咳に賞用される麻杏甘石から石膏を去り、軽い咳やのどのつかえをとる半夏厚朴湯から半夏、茯苓、生姜を去って、二方を合方し、これに柴胡と陳皮を加えた処方構成で、小柴胡湯証の体質の者のぜんそくや気管支炎に応用される。したがって水滞が少ないから、比較的痰が少なく、呼吸困難を主訴とし、気鬱の神経症をかねたものや小児に多く用いられる。

115.神秘湯

参考文献名		麻 黄	杏 仁	厚 朴	陳 皮	甘 草	柴 胡	紫 蘇 葉	用法・用量
診療の実際	注1	5	4	3	2.5	2	2	1.5	湯
処方解説	注2	5	4	3	2.5	2	2	1.5	
明解処方	注3	5	4	3	2.5	2	2	1.5	
後世要方解説	注4	5	4	3	2.5	2	2	1.5	
基礎と診療	注5	5	4	3	2.5	2	2	1.5	
漢方医学		5	4	3	2	2	2	1.5	
治療の実際	注6	3	4	3	3	2	4	3	

【注1】 原典の「久咳，奔喘，坐臥して臥するを得ず，並に喉裏呀声気絶するものを療す」により，気管支喘息に用いる。小児の感冒で，咳がでて，喘鳴のあるものに著効。

【注2】 一般に腹力弱く，心下もそれほど緊張せず，喀痰少なくして，呼吸困難を訴えるものに用いる。気管支喘息，肺気腫に応用。

【注3】 呼吸困難を主訴とし，比較的痰少なく，気鬱の神経症を兼ねた気管支喘息，肺気腫，小児喘息等に応用される。小柴胡湯証の体質者に発する喘息に用いる。

【注4】 必須目標：①呼吸困難 ②咳嗽 ③胃腸は丈夫。確認目標：①喀痰は少ない ②喘息発作恐怖症。

後世方特有の投網式な内容で，浅田流では本方を長服すれば，喘息は根治するという。

ただし証を誤ると，逆に窒息寸前の呼吸困難を起こすとの発表もある。「その原因は古方には絶対見当らない柴胡と麻黄の組合せによるものではないかという。」とあるが，これは本方が水剤の少ない方剤で，胃腸が丈夫で，消化管に水滞の少ない者が適応症であるのに，胃腸管に水滞のある者に投与したときの現象と言うべきである。

【注5】 喘息の薬。慢性で痰の少ない呼吸困難のある咳（喘息）により。喘息の体質改善に連用する。

【注6】 呼吸困難に用いる。小児の感冒で咳がでて，喘鳴のあるものに，著効がある。

処方番号：116

処方名：真武湯（しんぶとう）

処方構成：

茯苓 3-5、芍薬 3、白朮 2-3（蒼朮も可）、生姜 1（ヒネシヨウガを使用する場合 2-3）、加工ブシ 0.3-1.2

用法・用量：

湯

しばり：

体力虚弱で、冷え症で疲労倦怠感があり、ときに下痢、腹痛、めまいがあるものの次の諸症

効能・効果：

下痢、急・慢性胃腸炎、胃腸虚弱、めまい、動悸、低血圧、感冒、むくみ、皮膚のかゆみ

原典：傷寒論

出典：

解説：

原典である『傷寒論』には「太陽病、発汗し、汗出て解せず、仍（なお）発熱し、心下悸し、頭眩し、身ジュン動（じゅんどう）し、振振として地に倒れんと欲す」。また「少陰病、腹痛し、小便利せず、四肢沈重、疼痛し、自下痢し、或いはし、或いは嘔す」と記されている。頭眩とはめまい感のこと、また身ジュン動とは身体の筋肉がピクピクと細かく攣縮することである。少陰病期・虚証の利水剤である。

臨床的には極めて応用範囲の広い方剤で、『漢方概論』には、陰証の感冒、各種のめまい、運動失調、腸炎、下痢、ネフローゼ症候群、神経痛、関節リウマチなどに応用されると記されており、臨床上参考となる記述である。

『EBM漢方』には脳血管障害後遺症に対する、多施設症例集積研究が記されており、慢性脳循環不全患者で有用性が示されている。

116.真武湯

参考文献名		茯苓	芍薬	朮	白朮	蒼朮	生姜	乾生姜	乾姜	附子	炮附子	白川附子	用法・用量
漢方診療の実際	注1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
漢方診療医典	注2	5	3	3			3			0.5 ~1			
成人病の漢方療法	注3	5	3	3			3			0.5 ~1			
漢方処方応用の実際	注4	5	3	3			3			0.5			
漢方医学	注5	5	3	3			3			0.5			
新版漢方医学	注6	5	3	3			3			0.5			
現代漢方入門	注7	5	3	3			3			0.5			
漢方古方要方解説	注8	4	3.6	3	2.4		3.6			1.2			*1
漢方の診かた治しかた	注9	5	3	3			3			0.5			
1000万人の漢方診断と治療の実際	注10	5	3	3			3			0.5			
臨床応用漢方処方解説	注11	5	3	3			3	又は 1		0.5 ~1			
傷寒論入門	注12	3	3		2~ 3		3			0.5			*2
傷寒論梗概	注13	3	3	2			3			1.2			*3
漢方治療百話第一集	注14	5	3	3			2					0.5~ 1	
漢方治療百話第三集		5	3	3			3	又は 1		1			
漢方処方分量集		5	3	3			3	又は 1		1			
改訂新版漢方処方集	注15	3	3		3			1			0.3	又は 1	*4
漢方入門講座	注16	3	3	2			3			1			
	注17	3	3	2			3					1	
増補改訂入門講座		3	3	2			3					1	
新撰類聚方	注18	三 両	三 両		二 両		三 両				八片 (0.3)		*5
漢方入門	注19	5	3		3			1		1			
漢方医学の基礎と診療	注20	3	3		2	又 は2	3				0.3	又は 1	
新古方薬囊	注21	3	3		2		3				0.2~ 0.3	又は 1	*6
漢方精撰百人方		3	3	3			3				1		
実用漢方療法	注22	5	3	3			3				0.3~ 1		
明解漢方処方	注23	5	3		3			1		1			
金匱要略入門		-	-	-			-			-			
症候による漢方治療の実際		-	-	-			-			-			
漢方あれこれ		-	-	-			-			-			
続漢方あれこれ		-	-	-			-			-			

*1 1回に温服す（通常1日2、3回）

*2 温服すること1日3回

*3 附子は初めは0.3程度より

*4 3回に分服

*5 日三服

*6 四回に分け温服すべし。一日三回。

注1

・本方は少陰病の葛根湯ともいわれ応用が広い。一名玄武湯ともいう。本方は新陳代謝の沈衰しているため、水気が腸胃に滞留して、或は腹痛・下痢を来し、或は目眩・心悸亢進等の症状を現わす者を治す。腹部は軟弱で度々ガスのために膨満し、脈は沈微、もしくは浮弱で、身体の倦怠が甚だしく、手足が冷え易く、或は悪寒があり、一体に生氣に乏しい者を目標とする。この際の下痢は多くは水様便で、裏急後重はない。舌には薄い白苔のあることもあり、淡黒の苔のあることもあり、一皮むけたように紅いものもある。

・胃腸虚弱症・慢性腸カタル・腸結核・慢性腎炎・脳溢血・脊髄疾患による運動並びに知覚麻痺及び急性熱性病の経過中に用いることがある。

注2

・本方は、新陳代謝が衰弱しているために、水毒が胃腸に滞留して、あるいは腹痛、下痢を来し、あるいはめまい、心悸亢進などの、症状を呈するものを治す。腹部は軟弱で、時々ガスのために膨満し、脈は沈微または遅小弱、浮弱遅などを現わし、倦怠疲労感がはなはだしく、手足が冷えやすく、あるいは悪寒があり、一体に生氣に乏しい者を目標とする。

・真武湯の下痢は、慢性のものが多いが、急性のものにもみられ、下痢は水様便で、裏急後重はない。排便の直前に、腹痛を訴えることがある。

・本方は、茯苓、朮、芍薬、附子、生姜の五味からなり、附子と生姜は、新陳代謝を振興し、血行を盛んにして、身体を温める。茯苓と朮は体液の分布を調整して腸胃に停留する水を消し、その結果下痢、めまい、心悸亢進を治し、芍薬は胃腸の運動を調整する。

・本方は、諸種の熱病、内臓下垂症、胃腸弛緩症、慢性腸炎、腸結核、慢性腎炎、蕁麻疹、湿疹、脳出血、脊髄疾患による運動および知覚麻痺に用いる。

注3

[慢性腸炎] 全身の機能を整える処方で一日に一回、または二～三回の下痢が長年つづき、血色すぐれず、氣力に乏しく、脈も腹も力もなく、冷え症で、下痢のあとガツリと疲れる慢性腸炎に用いる。本方はこのほかに腸結核で下痢するもの、腹膜炎のあと癒着して下痢するもの、食べるとすぐ下痢するもの、夜明けごろ冷えて下痢するものなど、あらゆる慢性腸炎および下痢の良薬で、現代医学にはこれに相当する薬方はない。

[肝炎] 潜在性肝障害、氣力活力に乏しく、脂肪の多いものを食べたり、酒を飲んだりすると、すぐ下痢するものに用いる。

[湿疹と皮膚][蕁麻疹] 冷え症で下痢しやすく、血色のすぐれない老人の湿疹や皮膚炎に用いられる。発疹らしい発疹はないのに、かゆみを覚えるものによい。

[冷え症] 新陳代謝が衰えて活力がなく、疲れやすく、手足が冷え、腹痛や下痢する傾向のある冷え症や冷房病に用いる。

注4

[目標] 1) 雑病(無熱の一般慢性症)の場合 瘦せて生氣にと乏しい人が下痢して手足が冷え、めまいや身体動揺感を訴え、腹痛、嘔吐、咳、心悸亢進、利尿減少などがあるとき。脈は沈んで緊張が弱い。腹部は腹壁が薄く軟弱無力で、心下部に振水音がみられるものが多いが、ときには腹部全体が板のように固く張っていたり、あるいは腹直筋が拘攣しているものがある。

2) 傷寒(熱のある急性症)の場合 熱がなかなか下がらずからだ衰弱し、からだ重くて起きているのが苦しく、ねてばかりいる。体温が上がっていても、患者自身は熱感がなく、さむけが強いものが多い。咳が少し出ることもある。

[応用] 胃アトニー、胃下垂症、急・慢性腸炎、腸結核、腸狭窄および手術後の癒着、腹膜炎、諸種の熱性病(感冒、肺炎、気管支炎、その他)、神経症、腎炎、欠尿など。

注5

[目標] (一) 小陰病の代表的治剤で、腹部は軟弱にして、脈も亦弱く、手足は冷え、全身に生氣なく、腹診によって振水音を照明し、あるいは下痢を訴えるもの。

(二) 太陽病を発汗してのち、なお熱が下がらず、動悸、めまいを訴え、からだ揺れて倒れそうになるもの。

[応用] 胃アトニー症、胃下垂症、慢性腸炎、腸結核、腸管狭窄、腹膜炎、諸種の熱性病。

注6

[目標]元の名は玄武湯。新陳代謝が沈衰しているために水毒が胃腸に滞留して、あるいは腹痛、下痢をきたし、あるいはめまい、心悸亢進などの症状を呈するものを治する。一般に腹部は軟弱で、脈は沈微または遅、小遅、浮弱遅などで、倦怠疲労がひどく、手足が冷えやすく、生気に乏しいものを目標とする。

[応用例]内臓下垂。低血圧症。胃腸弛緩症。慢性胃腸炎。慢性下痢。慢性腎炎。蕁麻疹。湿疹。運動麻痺および知覚麻痺。

注7

胃アトニー、胃下垂、慢性腸炎、腸結核、腹膜炎、低血圧症

ジンマシン 冷え症で、下痢しやすく、血色のすぐれない老人のジンマシンに用いる。

肝炎前肝症候群(潜在性肝障害)で、気力、活力にと乏しく、脂肪の多いものを食べたり、酒を飲んだりすると、すぐ下痢するものに用いる。

注8

(一)眩暈の証、発熱なくして但だ悪寒し、腹部微満し、神思鬱塞して食慾なく、身体疼重を感ずる等の者。

(二)下痢疾患にして、或は喘し、或は乾嘔し、腹部及び腰部痛み、身体倦怠する証。

(三)慢性胃腸「カタル」等にして、常に手足に寒冷を覚ゆる証。

(四)下痢日に数行、身体疼重を覚え、尿利渋滞し、脈沈微の証。

(五)下痢久しく癒えず、或は身体に微腫あり、常に寒冷を覚ゆる証。

(六)諸般の水腫にして、身体衰憊し、手足に著しく寒冷を覚え、脈微弱なる証。

(七)種々の麻痺性疾患にして、手足時々震顫し、脈沈なる証。

注9

胃アトニー、胃下垂、慢性腸炎、腸結核、腹膜炎、低血圧症

注10

風邪：老人や虚弱タイプの風邪の場合に、体温計で高熱を示しても熱感がなく、寒がり、青い顔をしてぐったりと寝てばかりいるようなときに用いる。こういう場合には、一見すると重病に見えないので、つい見逃し、そのうえ高熱にだまされて発汗解熱剤をあたえたと、重篤におちいる危険性がある。

低血圧：生まれつき胃腸が弱くて、血色がすぐれず、手足が冷え、めまいし、脈も腹もともに力のないものに用いる。

胃アトニーと胃下垂：生まれつき胃腸が弱くて、血色すぐれず、手足が冷え、大便が軟らかくて下痢しやすい、脈も腹も共に力のないものに用いる。

メニエール症候群：苓桂朮甘湯の裏の処方で、冷え症の人のメニエール症候群に用いる。苓桂朮甘湯は心下部に停水を証明していても、脈や腹に力のあるものに用いるが、真武湯を用いるものは、脈や腹ともに軟弱である。めまい：動揺性のめまいに用いる。低血圧症で疲れやすく、冷え症で、下痢しやすいものを目標にする。

注11

[応用]本方は、少陰病の葛根湯ともいわれるほどで、陰虚症の新陳代謝の沈衰している病気によく使用される。表の陽気は虚し、内には陰寒、外にはなお虚熱があつて、内の水気が動揺して上衝し、その結果、心悸亢進、頭眩(めまい)、身体がふらふらして倒れそうになり、あるいは腹痛や下痢を起こすという病態に用いるのである。その応用を新撰類聚方に従って分類してみると、次のようになる。

(1)発熱するが、自覚症の比較的少ない虚症で、陰症の感冒・流感・肺炎(無力性)・肋膜炎・肺結核の一証。

(2)神経系の疾患、神経衰弱・メニエール症候群・脳出血・高血圧・アテトーゼ・振顫麻痺・眼球振盪症・内耳疾患・小脳疾患・錐体外路疾患等で、冷え症で胃部振水音があり、小便不利のあるもの。

(3)心臓疾患、心臓弁膜症・心不全で心悸亢進・小便不利・浮腫のあるもの。

(4)胃腸虚弱症・慢性腸炎・腸結核・大腸炎・消化不良症・胃アトニー症・胃下垂症・腹膜炎・腹水・小児自家中毒症等。

(5)腎炎・ネフローゼ・萎縮腎・慢性腎炎等で、虚証、浮腫のあるもの。浮腫あ圧して弾力なく、跡がすぐにもどらない。

(6)その他脚気・半身不随・リウマチ・湿疹・蕁麻疹・老人性掻痒症・遺尿症・夜尿症・雀目(ちりめ)・角膜乾燥症・眼底出血・パンヌス等ですべての陰虚証のものに広く応用される。

[目標]本方は少陰病を代表する方剤で、陰虚証に属し新陳代謝機能が沈衰し、水気が腸胃に滞留して、小便不利、あるいは上がって目眩・心悸亢進等の症状をあらわす。腹部は軟弱で、しばしばガスのため膨満し、脈は沈微、もしくは浮弱で、身体の倦怠感が甚だしく、手足冷えやすく、なおしばしば四肢沈重疼痛・麻痺・咳嗽・嘔吐・浮腫を現わし、全体的に生気にとぼしいものを目標とする。舌は湿潤し、あるいは薄い白苔、あるいは淡黒色、あるいは一皮むけたようなものもあり、尿は清澄で、下痢は水様便である。裏急後重はない。これを傷寒と雑病に用いるときの分類は、

(1) 傷寒の場合は検温してみると熱はあるが、自覚症少なく、外見は案外平気で顔色は赤くならない、蒼い顔をしている。肺炎などもいわゆる無力性のものに本方の証がある。あるいは自覚症状が強くても他覚症状の少ないこともある。

(2) 心悸亢進・目眩・運動失調を主証とするもの。

(3) 下痢を主訴とするもの、水様性で尿利減少・腹痛・下痢後脱力感・胃内停水がある。

(4) 浮腫、滲出液を主とするもの、虚症の浮腫で、押して軟らかで弾力性がなく、凹んだ跡がなかなか治らない、ぶよぶよした感じがある。

注12

太陽病に於て、発汗性治癒転機を起こさせ、一定度の発汗はあったが、病は治癒するに至らず、患者は依然として発熱し、心窩部に動機を覚え、眩暈を訴え、全身の筋肉は痙攣的に収縮し、そのために身体は均衡を失って地上に倒れようとする場合は、真武湯の本格指示である。

注13

これは汗の多い為に亡陽し、内は已に陰虚にして、外は尚ほ虚熱があり、且つ内の水気が激動して上に衝き、眩暈、身の痙攣、或は下痢を發する等の證に対する薬方であつて、主として打ちの陰寒を散じ、外の虚熱を解し、水気を去つて、其の激動を鎮むる等の能を有する。

注14

これも少陰病の処方で、少陰病の葛根湯といわれるほど応用範囲が広いものである。この方も虚弱者や老人に多く、特に平素胃腸の弱い人に起こり、胃腸に水気が停滞して腹痛、下痢を起こし、めまいや心悸亢進を訴える。体温もあまり上がらず、あるいは体温計では高熱を示しても自覚的には熱感が少なく顔色は蒼く、悪寒があつて手足が冷え、布団の中にもぐり込み、なんとなく氣力がなく、口渴もなくおとなしく寝ているというものによい。脈は沈微、沈細、あるいは浮弱で、全身の倦怠感がはなはだしい。胃腸型の流感に現われる。

注15

目標：発熱、心下悸、目眩、身はびくびく動くもの、或は腹痛、尿利減少、四肢沈重、下痢、或は咳し、尿利普通のもの、或は他覚的所見に比して、自覚症少きもの、或は反対に多いもの

応用：感冒、気管支炎、肺炎、肋膜炎、心臓病、腎臓病、胃腸病、腸カタル、大腸カタル、腸結核、高血圧症、低血圧症、麻痺、神経痛、筋肉リュウマチ、皮膚病

注16

主効 発熱するも熱感のないもの、手足冷え沈重疼痛、腹痛、尿量減少、下痢、或は心下悸、眩暈するものを治す。

脈 沈微或は浮弱 腹 軟弱

応用 感冒、肺結核、肋膜炎、急性慢性腸カタル、皮膚病、急性気管支炎、肺炎、心臓弁膜病、結核性腹膜炎、慢性腎炎、ネフローゼ

注17

構成 茯苓は、停水を去り鎮静を兼ね、白朮は恐らくは分泌中枢に働いて停水を動かし、ひね生姜は駆水と氣上衝を鎮め、芍薬は筋緊張を補力し、附子は温補をかねているから真武湯の適応症は虚寒で停水を兼ね、氣衝を現わすときに用いられることが察しられる。その作用のうち、或は温補が主になって虚熱を治し、或は駆水が主になって胃内停水下痢浮腫を利尿し、或は氣動上衝の悸、眩、運動失調等を治す。

運用一 自覚症状の少い発熱症状

運用二 虚寒証の心悸亢進、眩暈又は運動失調

運用三 虚証の下痢

運用四 浮腫又は体表の滲出性漏出性疾患

注18

一、感冒・流感・肺炎・肋膜炎・肺結核・葛根湯や小柴胡湯を服用して反って熱が上昇するもの等で発熱だけするか、或は発熱し他覚的所見が多いのに自覚症が少ないか、或は咳軟便小便不利等を伴う虚証のもの。

二、神経衰弱・メニエール氏症候群・脳出血・高血圧症・アテトーゼ・振顫麻痺・眼球振盪症・内耳疾患・小脳疾患・錐体外路疾患等の虚証で眩暈・振顫・脚弱症等があり、多くは冷え性胃部振水温小便不利する。

三、心臓弁膜症・心臓不全等の虚証で心悸亢進小便不利、或は浮腫軟便のもの

四、腸炎・大腸炎・腸結核等の虚証で下利小便不利、或は腹痛或は胃部振水音があるもの

五、消化不良で貧血下利小便ふり、甚だしければ発熱痙攣を伴うこともある。

六、自然・ネフローゼ・萎縮陣の虚証で浮腫不利のもの

七、慢性腎炎で高血圧網膜出血目眩頭痛頻尿を治した例がある

八、マラリヤで発作水瀉するものに使った例がある

九、結核性腹膜炎の滲出液・腹水で虚証小便不或は軟便或は便秘のもの

十、幽門狭窄・胃液分泌過多症・胃アトニーの類で或は下利し或は浮腫するもの

十一、吐血で胸中煩悶脈沈微満浮腫するのを治した例がある

十二、脚気で四肢重だるく、或は動悸浮腫小便不利等のもの

十三、肥満症で虚証貧血動悸小便不利等のもの

十四、癩の脱症・半身不随で口眼喎斜播擲するものに使った例がある

十五、筋肉リュウマチ・関節リュウマチ等で疼重する虚証のもの

十六、湿疹・じん麻疹・老人性掻痒症等で患部貧血性或は浮腫状或はうすい分泌多量或はかゆく虚証のもの

十七、遺尿・夜尿症で冷え性貧血或は蒼黒いもの

十八、陰証の雀目、陰証の眼底出血、パ Nusantara 等に使った例がある

注19

目標 元気なく疲労し易い体質、胃部に振水音あり、手足厥冷、腹部軟弱、尿色透明、尿量減少、めまい、浮腫、下痢、腹痛、低血圧。

応用 老人の慢性下痢、感冒、喘咳、腸結核、慢性腎炎。

注20

冷え性からきた病気の薬。強度の冷え性で、疲労がはげしく、熱が出たり、みぞおちに動悸が打ったり、目まいがしたり、からだがびくびく動いたり、手足が重く感じたり、腹痛や下痢を催し、小便の出方の少ない人によい。ただし、冷え性でも平素丈夫な人には使えない。

適応症 感冒。気管支炎。肺炎。肺結核。肋膜炎。心臓病。腎臓病。胃腸病。腸カタル。大腸カタル。腸結核。高血圧症。半身不随。麻痺。神経痛。筋肉リュウマチ。皮膚病。

注21

病人が但ウトウトと眠りたがる様になってから二三日を過ぎ四五日になってもそれが治らず、腹が痛み、小便の出が悪くなり、手足が重くうづき痛み、下利を自然となす者で、或は欬が出たり、或は腹が前から下っていたり、或は嘔吐者には先づ真武湯を與えそれでも治らない場合には次の加減法を用ふべし。欬の出る場合には本方中に五味子三。〇細辛、乾姜各一。〇を加ふ、若し小便の出が悪くならない場合には本方中より茯苓を除きて用ひ、若し下利している者には本方中の芍薬を除き乾姜を二。〇を加へ、若し嘔吐の出た場合には附子を去り生姜五・〇を加へて用ふべし。凡て加減方を用ひ、それにて効を見ざる時に初めて用ふべし、然る時は本證、或證、俱に差ゆるものなり。

真武湯の證 動悸高く気が遠くなり易く、自ら身體支へ難くぐずぐずと地面に倒れ掛る者。或は腹痛み下利し身體手足俱重くして痛み、小便の出悪く腫みのある者、時に咳の出る者、嘔気のある者等。

注22

・虚証で、脈や腹の力が弱く、下痢やすい。足が冷え、疲れやすい。腹痛が起きやすい。手足が重かったりだるかったりする。このような症状のいくつかがあつて、前に述べたようなめまいのある人には、時としてすばらしい治療効果を発揮します。

・慢性、急性いずれの下痢にも効きます。体力が弱っていて脈の力、腹の力が弱く、顔色も悪い。食欲はなく、下痢しやすく、人により毎日下痢する。歩いているとめまいを感じたりまた寒がり傾向のあるという症状の人によく応じます。慢性の下痢症で、どのような治療をうけてもなおらなかつたという人が、この処方でもよくなる例はすばしば多いのです。

・(低血圧により)めまいがしやすく、疲れやすくて根気がない。この場合のめまいは、じっとしていればしないが、歩くとフラツとしたり、または雲の上を歩くようでフワフワして、何となくたよりないといった感じのめまいです。頭が重かったり、下痢しやすかつたりもする。

注23

必須目標 ①外観生気なく疲労し易い ②胃部振水音 ③手足冷 ④尿色透明 ⑤食欲普通 ⑥舌は湿潤して舌苔なし ⑦腹部軟弱 ⑧脉は弱い。

確認目標 ①目眩 ②浮腫 ③下痢 ④腹痛 ⑤尿量減少 ⑥発熱(真寒假熱型で冷やすことを嫌う)
⑦筋肉痙攣 ⑧低血圧 ⑨動悸